



社会に対する専ら一方的な宣伝運動として評価されてきたセリコル運動は、実際には一般の農民の偶然的投書を一次的形態とした、多様かつ広範な大衆的契機を含む運動として構想されており、単に体制から農民に対する働きかけだけでなく、逆の過程、すなわち農民から体制に対するベクトルをも媒介することが期待されていた。体制と農村、権力と農民との接点としての農村出版物、及びそれらの周囲に形成された農村通信員運動は、当該期の農村政策の展開、そして当該期の農村地域社会における諸現実過程に対して、極めて有効な視座を提供するものと思われる。本論においては、通信員運動を、本来的に大衆志向の、体制と農民との相互作用の媒介を目指した試みにとらえ、そこでの体制から農民に対する働きかけだけでなく、運動を通じた農民から体制に対する反作用の在り方についても注目する。対象時期は、出版物の農村地域への普及と共に運動が形成され始めた1923年半ば頃から、対農民関係の全般的危機と共にネップそのものが終焉を迎える1929年初め頃までとし、末端における現実過程に常に注意を払いつつも、ラブセリコルに関する先行諸研究の大きな欠落部分であったところの運動の政策的・理念史的側面の解明に力点を置く。

本論の構成は以下のとおりである：第一章においては、セリコル運動の「前史」として、革命前のポリシェヴィキ出版活動に端を発し、革命後の『プラウダ』の実践によって継承・発展させられるところの通信員運動の基本理念について、ネップ期における通信員運動の事実上の創設者であり、当該期を通じてのその最大の擁護者であり続けたH. ブハーリンの運動構想、そしてそれをめぐる党内論議を中心に議論を進める。第二章においては、1923-1925年における農村出版活動の展開とその周囲における通信員運動の形成について、当該期の二大農民全国紙である『貧農』『農民新聞』を中心に追う。第三章においては、運動の発展と共に先鋭化した農村地域における通信員迫害の問題をクローズ・アップし、当該期の農村政策における新たな志向との関連において、かかる問題の再検討を試みる。第四章においては、いわゆる「再建期」の到来と共に、大衆への働きかけという従来とは逆のベクトルが追求されるに至った1926-1927年の通信員運動を、主に農村における建設活動との関わりから追う。終章においては、1928年以降の危機に際しての通信員運動をめぐる情勢の一変と、やがては運動そのものをも巻き込んで行くところの巨大な転換の意味内容が当該期のブハーリンの思想と行動から明らかにされた後、全体の総括と若干の今後の研究展望が提示されるであろう。

## 第一章 前史-ポリシェヴィキ出版活動と通信員運動の基本理念

「集団的煽動者」「集団的宣伝者」「集団的組織者」という有名なレーニンの出版テーゼは、出版媒体が革命運動の推進において果たしうる潜在的可能性を見抜いた彼の鋭敏な洞察力の賜物であった。しかしレーニンが出版媒体に求めた役割も、革命前期においてポリシェヴィキの

出版活動が実際に担っていた機能も、これらのテーゼのみでは言い尽くせないほど豊かなものであって、それは、しばしば複数の国境線をもって隔てられていた革命党と末端の労働者大衆とを結び付け、それらの間の様々な相互作用的やり取りのほとんど全てを媒介すらしたのである。このような出版媒体を通じての大衆との相互作用は、ポリシェヴィキの党活動の伝統の一部に組み込まれ、幾つかのレーニンのテーゼと共に、革命後の出版活動を担う活動家たちに継承され、新たな状況下に新たな意図をもって、通信員運動というこれまたユニークな大衆的社会運動へと展開される。

革命後においても出版活動という特殊な活動領域が大衆との提携において引き続き巨大な意義を与えられ続けた背景として、新たなソヴィエト体制下における「機構（аппарат）」の問題が存在していた。その現状は、革命前期にポリシェヴィキが描いた「コンミュン国家」の展望とは程遠いものであった。それは指導部と末端大衆との有効な結び付きすら提供せず、官僚的機能障害を示すこれらの機構を通じては、中央の「良き」施策もいずれかの段階で滞り、他方であらゆる下からの要素も上向の過程で濾過されてしまうのである。そして同種の問題は、党と大衆との隔絶という形で、「プロレタリアート独裁」の根源的危険をも生じさせかねない性格を有していた。

こうした官僚的機構体を介した不活発な、あるいは「死んだ」結び付きの反対物としての、出版物や通信員運動を通じた「生きた」結び付きの確保という発想は、ブハーリンの通信員運動構想の根幹をなすものであった。彼は、出版物を通じた「上からの」呼びかけと投書による「下からの」呼応という仕組みを整備することで、末端大衆との「非機構的な」結び付き、それら相互のより直接的な意思疎通の経路をつくりだそうと試みたのであった。まさにそのゆえに、彼は、運動をその他の組織や機構に縛り付け、その一部と変わらぬ状態にしてしまうような、あらゆる「既存の組織原理」の採用を断固として拒否した。こうした組織的差別化は、後に大衆的活力に満ちた社会組織としての通信員運動によって、「既存の諸組織」の諸弊害の矯正が本格的に試みられるようになるとき、とりわけ大きな意味を持つことになる。

## 第二章 ネット下の農村出版物と通信員運動の形成

ブハーリン的理念のもと、労働者大衆を主対象として都市部を中心に展開されていた通信員運動の実践は、『貧農』『農民新聞』の二大農民向け全国紙の尽力によって、1923年以降、農村地域にも拡大され、急速な成長を遂げる。新たな農村通信員運動の目指すところは、情報機構の末端、ないしその代用物を農村地域において創設しようとする優れて情報技術的な試みとは性格が根本的に異なっていた。それは末端の農民に対する第一次的な接近を目指した当該期の出版政策の延長上に形成された運動であり、投書という、そこでの農民の原初的反応形態に積

極的意義を認め、それに恒常性と積極性を与えることで農民から体制に至る意思疎通の経路をつくり出し、<sup>スミイテカ</sup>労農提携の確立・強化の手段として最大限に利用すると共にそれを農民の社会的領域への最初の接点として、活動を通じて農民の啓蒙教化・社会性の涵養を図り、さらなる公共活動・建設活動へと引き入れていくという壮大な試みであった。ゆえに運動が最も志向したのは、専ら農業に従事し、しばしばソヴィエト権力について何も知らないような末端の非党員農民層であった。

まず最初に運動へと関わった人々は、各村落の「先進的農民」と把握された。運動の萌芽期である1923年半ばにおいては、農村出版物は未だ普及途上にあり、何よりも農村における著しく低い識字率は、当初から一般の農民がセリコル運動に対して大衆的に関与するのを許さなかった。ゆえに最初期のセリコルの隊列の中には、読み書きはできるが農業との関わりが相対的に薄い住民部分、すなわち様々な農村活動家層・農村インテリ層が少なからず含まれていた。しばしば彼らは党員、コムソモール員であり、その場合彼らは、運動の定礎には一定の役割をなし得ても、その「大衆的」発展に直接寄与することはできなかった。他方で、後進的な農村においてより「文化的」で、農業改良や経営の発展に強く関心を持つがゆえに一般に共同体慣行に不満を抱き、しばしば区画地的土地利用への脱出を図るような農民層の運動への初期的関与が見逃されるべきではない。経済的には農業の復興、そしてその一層の発展を最重点課題とした当該期の農村政策は、そのような農民たちの「先進性」と「勤労性」を認めていたが、彼らは実際にも農民内における一つの有力な傾向を代表しており、セリコル運動は彼らに出版物を通じた自己主張の可能性を提供したのである。また様々な啓蒙・教育活動の進展、出版物のさらなる普及は、農民の大衆的部分の通信員運動への参与の可能性を増大させ、運動の「大衆的」拡大、運動の「農民化」が時と共に進行した。

運動の性格と経緯からしてその構成は雑多であり、セリコル像はしばしば矛盾していた。セリコルはしばしば「恒常的通信員」と「非恒常的（あるいは偶然的）通信員」とに分けて把握されたが、編集部と強く結び付いた寄稿者積極分子で、<sup>アクチーフ</sup>言葉の正確な意味でのセリコルである前者に対し、多くの場合後者は、何らかの客観的必要性に迫られてペンを取った一般の農民たちに過ぎず、両者の性格には少なからぬ差異が存在した。しかし初期セリコル運動においては、もちろん偶然的発信者の恒常的通信員への不断の前進が期待されつつではあるが、両者間の深刻な隔絶は感じられていなかった。「復興期」の農村政策の志向性は、かかるアマルガムが雑多ながらもある程度統一的な体裁を整えるのを促進したのであろう。何よりもそれは、農民が純粹に農民的な姿勢を保ちつつ最も活発なセリコルとして活動する可能性を提供していた。1925年3月のセリコル代表団のスターリン会見は、当時の最も活動的なセリコルたちが、正に「農民の代弁者」として振る舞っていたことを端的に示すエピソードである。これらと並行して中

中央の諸機関においては、出版物を介してやってくる膨大な数の農民の手紙への個別的対応やそれらの政策的反映を図る真剣な努力が行われており、そのような手続きの制度的整備も進んでいた。こうしてセリコル運動というチャンネルを通じて中央へともたらされた農民の諸要求は、やがて当該期の親農民的諸政策のさらなる発展・深化へと帰結する。

### 第三章 セリコル迫害問題と末端機構の改善

前章までで見てきたように、初期セリコル運動に期待されていたのは、主として農民から体制へと向かうベクトルを媒介する機能であったが、当該期の運動がそのような役割を担わされた背景には、まさに「機構」の問題、末端機構の農村社会からの「遊離」ないし農村社会への「埋没」と形容される当時の客観的状況が存在していた。農村地域の党・ソヴィエト機関は量的にも質的にも著しく弱体であり、地域の実情にかなう実際の活動も、農民の訴願や諸要求の吸い上げもできず、その現状はしばしば農村住民の不満の直接の対象であった。セリコル運動にも確と継承されていた通信員運動の基本理念、現下の体制における機構の硬直性・官僚性の解毒剤として運動を通じて大衆の活力を導入するという発想は、1924年秋の「ソヴィエト活発化」政策の開始に伴い、出版活動を通じた末端機構の改善が一種のキャンペーンとして呼びかけられるに及んで政策的祝福を受けるに至る。それはより広範な農村住民層にアピールし、運動の成長を一層促進すると共に、既存のセリコルたちの摘発活動の矛先を末端機構へと向けさせ、全体としての運動の農民的性格をより明確化させた。

末端機構の側もセリコル運動内のそのような傾向を素早く察知し、敏感に反応した。運動の急速な成長と共に先鋭化したセリコル迫害問題は、運動のこうした方向性に対する末端機構の側からの拒否反応として理解することが可能である。とりわけ地方党組織は、末端機構を対象とした執筆活動全般を、一様に農村社会の側からの突き上げと理解し、農村細胞から、しばしば郷・郡のレベルまで強固な一体性を示して抵抗した。そこに彼らは、自分たちが「プロレタリアート独裁」とみなす体制全体の深刻な脅威を見いだしたのである。地方党組織は、近隣のセリコルの活動統制に躍起となり、手紙の検閲や差し止めを試み、中央では早々と放棄されたセリコルの任命制・選出制に長らく固執した。同時期に党中央で展開された通信員の組織形態をめぐる論争においても、セリコル運動に対する党内の同種の不安を看取することができる。しかし当該期の諸論争は、農民に対する体制側の譲歩の色彩を帯びつつも、政治的にも、経済的にも、農民の側の自発的・民主的契機を最大限に尊重する方向で全て決着することになる。

### 第四章 農村出版活動と「再建期」の諸任務

運動の進展と共に、末端におけるセリコルと党組織の軋轢は止むどころか、永続化する兆候

を示した。大衆は末端のコミニストの悪行や職権濫用を告発するだけでなく、しばしばソヴィエト国家におけるコミニストの指導的立場の疑問視にまで、個々のコミニストだけでなく、党そのものの攻撃にまで進んだ。このような大衆の側からの「攻勢」に際して、切迫した政治的危機意識を抱くに至った党指導部は、1925年後半以降、本来相互作用的と想定されていたところの運動におけるバランスの回復を模索し始め、それは1926年5月の第3回全連邦会議のブハーリン報告において「党指導の強化」なるスローガンをもって、明確化されるに至った。しかし少なくない苦勞の末に獲得された通信員運動の特性確保に対する配慮は引き続き巨大であった。「新しい組織」の基本原理は全く変更されなかったし、ラブセリコルの自発性は、新たな教育・組織活動の推進に際してすら、最大限に尊重されねばならなかった。

かかる展開の一つの背景としては、通信員運動に関する従来の党中央の方針が末端党組織の知るところとなっておらず、それが運動の偏った展開の原因となっているとの認識があった。ゆえに新たに強調された指導の「強化」は指導の「改善」とほぼ同義であり、内容的には従来の党の任務を再強調したのみの部分が少なくなかった。しかし事態は一向に好転の気配を見せず、その後も何らかの調査や報告の度に明らかになるのは、中央の意向が末端の党組織にまではほとんど到達していないという事実であった。指導は相変わらず、完全な放任か露骨な圧迫かに歪曲されていたままであった。

このような党組織の側の鈍い反応に比べて、出版活動を通じた体制の側からの新たなアプローチに対する農民の側の反応は極めて敏感であったと言える。経済建設における「復興」から「再建」への移行意識も手伝って、農村地域のアクチーフと見られたセリコルに対する党中央の要請は著しく増大した。今やセリコルは、体制から農民へという従来とは逆のベクトルの媒介に努め、当地における様々な建設課題を成功裏に達成するために中央の諸スローガンを積極的に実践しつつ、他方であらゆる下からのイニシャチヴを喚起し、それを上へと吸い上げる機能を期待されるに至ったのである。かかる新路線の採用によって1927年までに明確化したのは、それまで広義の「セリコル運動」として統一体の外観を保っていた農村住民の投書行動内部における分裂傾向、狭義の「セリコル」、セリコル・アクチーフと一般の偶然的発信者との間の溝の深まりであった。新路線の切り札と見られた農村地域におけるサークル・壁新聞活動は、専ら前者のみによって推進され、後者の段階的参入を伴わなかった。さらには運動の基礎過程において、既存の通信員の離脱の増大、新参者の減少、さらには全ての起点であるところの農村出版物の購読部数にすら陰りが見え始めたのである。しかし中央の指導者たちは、再び地道な運動展開からの建て直しを決意していたように思われる。「危機」は未だ破綻を意味してはいなかった。

このように全体としてバランス・シートはマイナスであったが、文化活動や経済建設等の領

域における運動を通じた農民大衆へのアピールは、しばしば恐ろしく「非合理的な」農村社会の伝統との相克を経験しつつも、ある程度の実効性が伴っていたように思われる。しかしネップの相対的に平穏な日々は長くは続かなかった。1927年末の穀物調達危機に端を発したポリシェヴィキと農民との相互関係の激震は、「再建期」の諸政策はおろか、その大前提であるところのネップ的枠組みそのものまでも押し流すであろう。

## 終章

1927年末から先鋭化した穀物調達危機は対農民関係全体を未曾有の緊張へと導き、通信員運動によって立つ基礎は大きく揺らいだ。新たなスターリン派の面々は、危機に際して、通信員運動が未だ媒介していたところの農民からのヴェクトルを払いのけ、逆に権力の論理を全面主張する道を選んだ。すなわちそれまで大衆から党へ、党を通じて国家へと向かっていた社会的ヴェクトルは、国家との「癒着」の一掃結として今や「国家理性」の虜となった党によって、権力の論理をもって拒絶されるに至ったのである。かくして体制と農民との相互作用の媒介物としてのセリコル運動は終焉を迎え、その後には運動に関する幾つかの「伝説」と、権力の論理を専ら一方的に喧伝し、大衆を動員・操作するシステムのみが残された。

以上のような展開を見せたネップ期の通信員運動を理念と実践の両面において一貫してリードし続けたのは、党の最高指導者であると共に、党中央委員会機関紙『プラウダ』の編集主幹として当該期における最も傑出した出版活動家の一人でもあったブハーリンであった。運動を機構の反対物たる大衆の自発的社会組織たらしめようとその組織原理の案出に頭を悩ませたのも彼であったし、それを通じての大衆的・社会的契機の導入による大胆な機構改善の試みを主導したのも、後期ネップの状況下において運動内部のバランスの回復に努めたのも彼であった。そして1920年代末における彼の最終的な政治的敗北と共に、ユニークな大衆的社會運動としての通信員運動も終焉を迎えたのである。新たなスターリン派が掲げる国家の論理に対して、ブハーリンは、通信員運動の媒介する社会の論理を対置したまま、政治の表舞台から退場して行くことになった。それは、古典的マルクス主義が掲げた「国家から社会へ」の理念のソヴィエト政治の舞台からの退場を意味し、従来、党が大衆に対して体現していたところのリーダーシップの根本的変質を伴った。

続く第1次五か年計画期に工業化と集団化の熱狂の中で最後の輝きを見せたラブセリコル運動は、以後、大衆の動員手段としてもその有効性を急激に減退させていく。スターリニズムの興隆と共にその沈滞は30年半ばに極限状態に達したと言われる。大戦を経て、50年代後半から60年代にかけて、「スターリン批判」の流れに沿い、大衆の自発的社會運動としての通信員運動は再度注目を浴びるに至るが、そのような動きも、より大きなレヴェルでの「非スターリン

化」の試みの終息と共に頓挫してしまった。以後70年代に入っても、そしてソヴィエト社会の停滞の中で80年代に入ってすら運動の蘇生が試みられたが、結局は実を結ぶことはなかった。これはスターリン体制成立以降、ソヴィエト社会の本質的な要素となり、その後も持続的に本質的であり続けたものが、ラブセリコル運動の原理とは相いれなかったことを示唆している。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、ネップ期ソ連邦において展開された農村の出版活動と農村通信員運動に焦点を定めて、その展開過程（1923-29年）を農民の膨大な通信文を基礎史料とし、その解読分析をとおして農村社会＝農民大衆の自律性を解明せんとしたものである。この作業をとおして論者は、最終的に当該期の「プロレタリアート独裁」下においては、党と国家と社会には独自の緊張と相互間の自律性を特徴とした関係が存在したことを明らかにしようとしている。

本論文の序章では、まずこうした基本課題が提示されるとともに、これまでの内外の研究史が整理されている。1991年のソ連邦崩壊によって、ソ連邦史はようやく歴史研究の対象となるとともに、第一次史料利用の可能性が開かれることとなった。そのような条件は、カナダやアメリカの若手研究者による農村出版活動や農村通信運動に関する学位請求論文を多数生み出ししてきた。論者は、そうした一定の歴史研究の蓄積を前提としつつも先行研究史にはらまれる問題点に注目する。それは、ネップ期の農村通信員運動が、何よりも党中央からする「上から」の農民大衆への啓蒙・宣伝・指導活動に他ならないとする基本的な観点が貫いていること、その背後にはネップ期のソ連邦においてはすでに「党＝イコール国家」であるとする体制が確立しており、農村社会はこれに受動的に対応する存在に過ぎなかったとする固定的な見方が存在した点である。論者は、こうした観点を批判して、ネップ期のソ連邦体制は、まだその内部に国家権力の主導性をめぐる対立が存在していたこと、また農村社会は決して受動的な存在だったのではなく、党の末端機構と農村通信員との間には独自の緊張関係が存在していたのではないか、という基本視角を立てている。

その上で、まず第一章では、ポルシェヴィキ革命において位置づけられた出版媒体の役割に関するレーニンの基本理念「革命を指導し、推し進めるものとしての、また党と人民大衆をつなぐ媒体としての出版活動」が確認される。その上で、労働者に対するラブコル運動と並んで組織された農村に対するセリコル＝農村通信員運動に関して具体的な構想を練ったブハーリンの構想とそれをめぐる党内情勢が分析される。その中で出版活動や農村通信員の活動については党の働きかけが主導するとはいえ、農民大衆の自発性を引き出し、党と大衆との双方向性を



保障するものとしての「投書」の役割が最終的に重視され、それを前提として農村通信員運動が展開していくことが確認されている。

第二章では、具体的に農村における出版活動と、農村通信運動展開の初期段階を具体的に『貧農』紙と『農民新聞』紙を素材として、農村通信員の構成や両紙に投稿された「農民の投書」の内容が分析される。その結果、党機関紙プラウダの40倍を越える購読者数を持った『農民新聞』に掲載された農民の投書が、政府の農業政策や当時農民が抱えていた農業問題、そして何よりも農村社会の様々な問題点を農民自身が主体的に把握し、投書していた事実が詳細にわたって明らかにされている。初期の運動を担った『貧農』紙には当時の農村社会の識字率の低さが関係して、農村活動家や農村インテリが参加するだけで、ブハーリンの政策的意図は必ずしも達成されなかったのに対して、後者の『農民新聞』において初めて、非党員の多数の農民層に対する働きかけが成功していくことが確認されている。1925年3月のセリコル代表団のスターリンとの会見を、論者はその象徴的事例として挙げている。

第三章では、このような農村社会の自律性が頂点に達して以降、農村通信員に対する迫害事件として、従来は「富農クラーク層による反革命運動」として理解されてきた事件を分析することによって、この事件が党の末端機構と農村社会との間で発生した緊張関係を示すものに他ならないことを明らかにしている。つまり、一方での党の末端機構の農村社会からの「遊離」、他方での末端機構の農村への「埋没」をともに回避するための運動として1924年秋に開始された「ソヴィエト活発化」政策が、農村通信員の活動を党末端機構の改善に向けた農民運動の側からのベクトルとして展開させていくことを保障したこと。この過程でセリコル迫害問題が発生したことが解明されている。具体的事例分析としては、1923年3月ウクライナのオデッサの小村ドゥイモフカで発生した、農村地域コムニストがセリコル通信員を迫害した事件が分析されている。

第四章では、第三章の事件を契機として農村通信運動の性格をどのように位置づけるのか、通信員運動を党から相対的に自律性をもつものとするのか。その場合に、そもそも党は労農大衆の批判の対象なのか、それとも指導者なのか。これらの問題をめぐる論争のなかで1925年後半以降展開していく党の指導性強化の方向性。また農村社会におけるセリコルと党組織との軋轢の永続化。このような情勢を背景として、経済建設における「再建」期への移行が党中央から農村に対する農業改良運動への要請の強化となって現れていくこと、その中で農村のアクチーフであるセリコルに対する「上から」の要請が強化されていくこと。このことが、農村通信員運動の性格を大きく転換させていくこと、農村通信員運動の要である投書活動、党と結びつく農村アクチーフと農村社会の自律性を代弁するセリコルとの間に明確な亀裂が発生していくことが跡付けられている。

終章では、1927年末からの穀物調達危機が農村社会全体の自律性を奪い取り、農村通信員運動そのものをも最終的に葬り去っていくことが展望される。その上でネップ期の農村通信員運動が、党、国家、社会三者の関係において民主的なソ連邦形成の可能性を示す一つの運動であったことが結論づけられている。それは、何よりもネップ期が党や国家に対する農村社会の主体的な自律性が展開していた時期に他ならず、現実に貫徹したスターリン体制からその後1991年まで続くソ連体制が押し込めた民主的なソ連邦のもう一つの現実には選択されなかった可能性が存在していたことを意味することを論者は明らかにしている。

論者は、以上の考察によって農村通信員運動の新しい理解を提示するとともに、旧来のソ連邦史、ロシア現代史の教条的かつ硬直的な歴史像を克服する研究視角、そして何より豊富な史実を対置することに成功している。ソ連邦崩壊以後の情報公開の恩恵を得た論者の研究によって、ロシア現代史の実証水準は大きく引上げられるとともに複眼的なソ連現代史像の再構成への道が大きく切り開かれた。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。